御雇上ニ而、日光表江罷越、御普請御用無滯相仕舞候ニ付、其節牛持勘左衛門と申者、仙臺江御召連被成、今以右勘左衛門跡、牛車渡世罷在候由及承申候、

右之外、國々牛車有之候場所、及承不申候、○中略

右御尋ニ付申上候、以上、

文化十二亥年十二月　　芝車町名主　四郎左衛門

御番所様

〔江戸名所記五〕芝　泉學寺

門前より打つゞきて、牛町とて四町あり、これ牛車をつかふところ、をよそ牛の數も一千疋に及べり、古しへは淀鳥羽に車借ありて、都ならでは牛車なかりしを、江戸は東の都にて、牛の車をゆるされ、いか成土橋板橋のうへをも、心のまゝにひくとかや、この故に車借のともがら、牛をえらびてもとめやしなふ、○中略　寛永年中より初まれり、

〔江戸名所圖會三〕牛小屋　牛町にあり、延寶江戸圖に、此地を牛の尻と云とあり、牛を畜する家多く、牛の數一千疋に餘れり、○中略　古は淀鳥羽にのみありて、都の外には牛車なかりしに、御入國○德川家康の頃より許宥ありて、江府にも是を用ゆる事となれり、餘は駿河にあるのみにて、唯此三ケ所に限れりとぞ、

〔春波樓筆記〕江戸車町は、芝高輪の手前、牛屋あり、是はいにしへ御入國の時、東照神君、大津牛を呼びよせらる、百三十六疋といふ、御城の石垣の石を牽かせたり、二代將軍秀忠君の時に至りて、牛方共大津へ歸らん事を願ふ故、五十六疋を留めて、殘をおん返しある、飯田町邊に牛原と云ふ所あり、車置場は江戸橋の四日市にあり、牛車追々渡世薄くなり、牛三十六疋になる、其の後牛原の牛、今の車町に來たる、海ぎはの地、車置場になる、漸々減じて今五軒となりぬ、大八車のみ用をなす故なり、千場太郎兵衛と云ふ巨家あり、牛屋に千場氏あり、太郎兵衛もと此の家の牛牽なり、故